# 旧齋藤家別邸が危機を乗り越えた理由と今後の活用の課題。

旧齋藤家別邸保存運動で大きな力を発揮されたのが、茶道団体の皆様と造園関係の皆様です。元来個人住宅の邸宅庭園の価値は所有者及び所有者の関係者しか知り得ず、他人にとっては存在すら知り得ないことが多いと思われます。よってその邸宅庭園が存亡の危機に直面しても、人知れず消滅する事が多々あります。

ところがこの旧齋藤家別邸は違いました。前所有者の加賀田さんは（この邸宅庭園の価値を創建当時のまま維持し活用されてきた加賀田さんの功績も忘れられない事だと思います）ここで多くの茶会を開催していたことで、当会会長をはじめ多くの茶道関係者がこの邸宅庭園の価値を認識しており、また造園関係団体を通じ県の教育委員会が庭園の調査を行い価値を表明していたことで多くの造園関係者も又その存在を認識しておりました。

存亡の危機に直面したとき、消滅させては新潟市にとっても、それぞれの世界にとっても大切な宝を失う事になるということから保存運動の大きな原動力となったのでした。

現在新潟市の所有になり今後の活用に関して色々な意見を市民から求め良好な活用がされることを願う訳ですが、参考になる活用事例として山形に清風荘（宝紅庵）という施設があります。焼失した建物を約一五〇年前に再建し、現在は山形市所有で国の登録有形文化財となっている歴史的建造物です。この施設は茶道の団体をはじめ日本の伝統文化を継承する多くの団体が日々活用しています。建物は使う事に価値が有るのはあたりまえですが、毎日の活用で日々の清掃やメインテナンスが行われます。活用団体にとっても自分たちで維持管理しているという意識も生まれます。

お茶会が開催されていた当時の様子

旧齋藤家別邸邸宅庭園の価値を早くから認識し保存に尽力をした茶道の団体をはじめ、多くの日本の伝統文化を継承する団体から日々活発に利用してもらうことで、この邸宅庭園が新潟市における日本の伝統文化を継承する中心的役割を担えたらと思っています。

伊藤純一（いとう じゅんいち）
旧齋藤家別邸の会・幹事

# 耐震工事について浮かび上がる問題。建物を後世に残すことについて。

旧齋藤家別邸の建物を現代の法的基準に合わせて耐震を考える事は極めて難しい問題です。根本的な建築方法が違っているからです。現代の方法はコンクリートで作られた基礎に土台を緊結して地震力を地面に伝える、そして地震力に対しては斜めに掛かった筋交いを頼りに対応するという考え方です。

一方、旧齋藤家別邸はそもそもコンクリートの基礎が無く、自然石の上に土台を乗せその上に柱を立て貫という横材を細かに柱に縫い付け、そこに竹で壁下地を作り土壁を塗る。地震に対する備えはというと、斜材は設けず足固め、長押などの横架材で対応しています。

基本的に筋交いと違うことは揺れに対して完全に抵抗するのではなく、ある程度揺れにまかせる、最終的に地震力が大きい場合は土壁が壊れて地震力を逃してしまうという考えです。

もともと考え方の違う建築を現代の基準に合わせて「耐震」を考えるには無理があると感じて、どうなることかと不安を抱いておりました。もちろん今でもその不安は消えませんが、先回新潟市歴史文化課の説明を伺って少しは安心しました。

考え方がかなり柔軟であることと、こちらの提案が受け入れられるかどうかは別にして、建物の使い方によっては積雪荷重を考慮しないで考えることも検討して頂けるとの話でした。

この考え方が良いかどうかには是非があると思いますが、山の上の茶室に関しては、雪のある冬季間は使用しなければ地震時の積雪荷重は考えなくとも良いのではというものです。積雪荷重を考慮しなければ構造計算も全く変わってくる筈です。わずかな期間使用しなければ建物の構造が現在のままで、あるいは軽度の補強で済むとしたら検討する価値はあると思います。

耐震に関する事と少し離れますが、旧齋藤家別邸を観て感じていた事の一つに縁側の柱が三間も離れているのでどんな構造になっているのか不思議でした。しかし、先回の説明会で建物調査図面を拝見し解りました。

縁側の梁は建物の内側から一間おきに跳ね出して縁側二階の床を支えていたのです。一階には柱がなくとも大丈夫。また、屋根も縁側の面する所はせがい造りになっていて雪の荷重をこの縁側にかけない様工夫されています。それに床や屋根の水平力を維持する工夫にも感心させられました。あらためて我々はもっと先人の技術を勉強する必要があるように思いました。

三鍋光夫（みなべ みつお）
旧齋藤家別邸の会・幹事

# 旧齋藤家別邸・保存運動の経緯

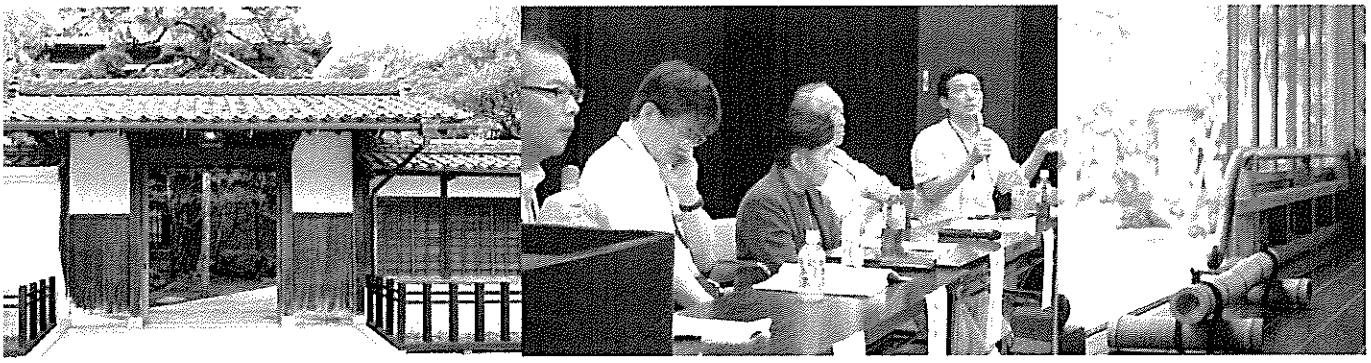
旧齋藤家別邸の会・事務局　新潟まち遺産の会・事務局　伊藤純一

6月9日オープン初日、旧齋藤家別邸(以下別邸)の1階入り側縁に座り庭を眺め徒然思いを馳せた。強い日差しがないので陰影が抑えられた庭全体が美しい。つつじの花が見頃で紅葉の葉も小雨に触れて艶々している。こういった空間を作り出す日本人はすごいな、そういった感性を持つことができる日本人でよかったな、そしてこの素晴らしい邸宅庭園が新潟にあり新潟人でよかった、新潟を誇りに思う、そして後世にその誇りを受け継ぐことができて本当によかった、そんなことを思っていた。保存運動で東奔西走しまともに仕事ができないきつい時期もあったがそんなことをすべて忘れさせ癒してくれる空間がそこにはあった。いろんな思いが頭をめぐり感無量のひと時が静かに過ぎていく。

保存運動から今に至る経緯は小田代表をはじめ寄稿者も触れている事と思うが、私なりにも簡単に振り返りたい。

私は新潟まち遺産の会という新潟を歴史が感じられる街にしたいという理念の下活動している市民グループの事務局を務めている。当会の代表である大倉宏は町屋や近代建築の存続の危機に幾度も直面し保存運動にかかわってきた。新潟の歴史的町並み、建造物の存続や行く末に関して敏感に反応する私達のもとにこの別邸の存在、動向、そして存続の危機の情報が入ってくるのにそう時間は要しなかった。この別邸の価値を一番熟知して行動を始めていた陶磁協会の小田先生と保存運動の経験者である大倉がともに運動を始めるに何も障壁はなく、今から7年前、2005年にすでに関係各所への要望書提出が可能なほどネットワークは広がり準備は整っていた。しかし当時はまだこの邸宅には住んでいる方がおりその方を知る小田先生の配慮の意から要望書の提出は時期を見極める状態が続いていた。当然水面下では当地の開発、売却の話がささやかれ緊張感が続く時であった。

まち遺産の会ホームページ　http://machi-isan.sakura.ne.jp/



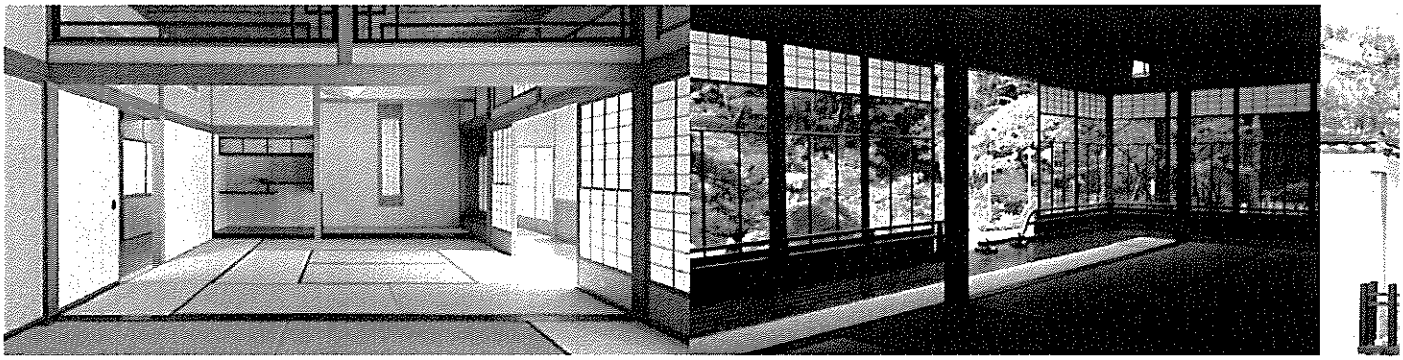
その後状況を鑑みこれ以上行動を控えるのは手遅れの可能性もあると判断2007年12月28日、市長、市議会議長、所有管理会社に要望書を提出。この別邸の存続の危機を世に知らしめる事となる。ここからの活動は加速度も付き活発になる。この別邸の危機を脱却するため、この邸宅の保存運動のための会「旧齋藤家夏の別邸の保存を願う市民の会」の立ち上げを準備し、ネットワークを固め8月3日の発足準備会を経て小田代表、小山、大倉両副代表の体制で会が発足し運動を展開した。

市民の声を盛り上げていく必要が有ったが、署名を集め様にも今まで個人の邸宅だったため知る人ぞ知る的存在でまだまだ認知度が低い。なんとか良好の環境で市民にここの存在、価値を知ってもらう必要があるということで、所有者に懇願し一般公開の実施を目指した。その一般公開において大きな力を貸していただいたのが茶道の団体、造園関係の団体の皆様。

元々この邸宅では定期的にお茶会が催されており多くの茶道関係者にはその存在、価値が知られていた。小田代表はその関係者からも人望が厚く、邸宅の保存価値に加え、小田先生のために一緒になって運動する、といったお茶の先生方の力は大きいものだった。一般公開、署名活動と多くの方々よりご協力をいただいた。

造園関係者の間でもかつてよりこの庭園の価値は伝えられており文化財調査の対象になっていたことは業界内の周知の事実であった。出入りの業者や所有者のご好意により多くの造園関係の人々が見学経験を持っており、この庭園を喪失してはいけないという価値を認識していた。一般公開のたびボランティアで手入れをしてくださった庭師の人数は延べで86人にのぼりその手入れのおかげで美しく整備された庭を市民が見ることができ、これは残すべきだと保存の価値を認め多くの署名を集めることにつながった。

加えて保存運動の経験を持つ当会、新潟まち遺産の会を含むまちづくり系活動団体の協力の下、一般公開を3回（8月24日、10月25日、11月30日、延べ562名の入場者）街頭署名活動3回（9月14日、9月15日、10月19日）を含め約26379人から保存を願う署名を集めることができた。市長、市議会議長への署名簿の提出は9月25日、12月22日の2回にわたり、多くの市民の声を持って市議会に公有化の請願を2008年9月議会に初付託、一度は保留案件になるもついに12月市議会で公有化が認められた。正式には本会議を経ての決定事項ではあることは知っていたが、12月16日総務常任委員会での採択の瞬間は感極まるものがあったことを今でも思い出す。



その後は公有化決定を受け、保存を願う市民の会から「旧齋藤家別邸の会」へと発展的移行、改めて、別邸の価値を掘り下げる活動や、耐震改修手法等整備に関して提言、良好な利活用ができる様さまざまな活用方法を提案実施してきた。活動の実績は別途記載する。

保存運動を経て公有化後行政に意見を届ける活動、そして指定管理者の選定まで活動は長きにわたってきた。今後別邸の管理を担当する者の中には一緒に運動をしてきたメンバーもいる。まだ文化財指定という願いも残ってはいるものの、ここまでの運動を一区切りつけるということで旧齋藤家別邸の会は解散することとなった。これからは一ファンとしてこの別邸の価値、魅力を享受しそして多くの市民、県外客にアピールしていくこととなろう。

2012年6月、開館にあたってのテープカットの様子。

あらためて庭を見ながら思い出した言葉がある「もしこの別邸が無くなった後にその存在を知った人はその時周りにいた人間を笑い者にするよ、笑われてしまうよ」と。かつて新潟市民は幾度となく笑われても仕方ない様な事を行って来たのではないか。そんな負の負い目が蓄積され今回の運動の力になったのではないか。もしこれが10年早い事だったらこの別邸は残っていただろうか。この別邸が残るために失ってきた物があるのではないか。残った物は今後未来に向けそんな他の物件の為にも伝え継ぐ必要があるだろう。

日本庭園、歴史的建造物というと年配者の専売特許のように思われるが、この別邸は違い、どんな年齢の人間にも感動を与える。今、日本という新潟というアイデンティティーが失われつつある中、特に若い世代にこの別邸を通じ、思い、感じ、そして次の世代へと伝えていただければと思う。日本人でよかった、新潟の人間でよかった、と。

新潟日報『assh』誌表紙より